



戦史を超える犠牲

— 日本発展の礎となった炭鉱殉職者

炭鉱の歴史は、犠牲の上に書かれた日本の発達史だといわれてきました。明治時代からの町内戦没者は千数十人。町内の炭鉱で命を失った人は、千五百人をも上回ると予想されます。その中には強制労働で祖国を夢見ながら亡くなった人や墓碑さえない人も多くいます。それらの遺骨は、大非常の犠牲者も含め、いま、この町でどこか



「毎月1日に、山の神の招魂碑に方城炭鉱の労使が献花し、大非常の犠牲者に手を合わせています」と振り返る福田文雄さん（伊方町鶴ヶ丘）当時、採炭現場の調査や管理をした。

で眠っています。石炭産業史より多い命の犠牲を持つ歴史は、戦史以外にないといわれますが、この町では戦没者よりも炭鉱殉職者の数が上回っているのです。
三菱方城炭鉱に閉山前年まで勤めた福田

命とまなぶ

悲しい過去を忘れてはならない。目を背けてはいけません。 真実を見つめて

文雄さんは言います。「落盤事故の現場で、故人が大切にしていた懐中時計が持ち主と反して時を刻んでいました。無情に流したあの場面が忘れられない。命の重さ考えたとき、大非常がどれほどの犠牲と悲しみを生んだのか。過去があつてこそ今があることを子どもたちの心に刻んでほしい。」
かつて大非常の日時に響いていた哀悼のサイレン。旧方城町で戦没者と炭鉱殉職者の合同慰霊祭を行うようになってから、鳴ることはありませんでした。今は方城炭鉱の菩提寺であつた福圓寺の慰霊祭で梵鐘の音が響くのみです。列席する遺族や関係者の数は年々減り続けています。
福圓寺の富永元元住職は「坑内で亡くなり、地底に埋もれたままの多くの人がい



大非常の犠牲者の位牌（写真右）や霊鑑がおさめられている福圓寺では、住職が毎朝夕かかず犠牲者を供養している。「わが子を残して一瞬のうちに、何も分らずに亡くなった数百の霊、その犠牲者の気持ちになつて先々代から供養をしています」と富永元元住職。



赤池の松本墓地に点在する無縁仏の墓石。戦時中の強制労働で、方城炭鉱や赤池炭鉱にいた朝鮮や中国からの労働者たちは「生きて必ず祖国に帰ろう」と勘まし合いながら、過酷な状況にたえていたという。

日本経済発展の礎を築き、多くの犠牲をはらんだこの町のヤマ、隆盛は誇らしげに伝えられますが、暗く悲しい過去は、長年伏せられてい傾向にあります。
文化財専門委員会副委員長の永末宏さんは言います。「炭鉱で栄えた時代は、坑内災害を予感させる大非常のことを口にしない風潮がありました。そして過去には強制労働で送り込まれた多くの人たちが、過酷な勤務を強いられた末に命を落としています。たとえ払拭したい出来事であつても、わたしたちは真実を見つめ、見極める目を持たなければなりません。」
過去から目をそらすのではなく、向き合うまなざしがあつてこそ、人権や命の重さを受けとめることができます。そして、沈黙の間にあつた大非常や多くの犠牲の存在が、この町で浮かび上がってくるのです。



「歴史の表面だけでなく、その意味を理解し、語り継ぐことが大切だ」と語る元教諭の永末宏さん（弁城追）かつて、炭鉱災害の防止をこころざし、明治専門学校（現九州工業大学）に進学した。

大非常のメッセージ

— 郷土の歴史と向き合う視点

日本史上最大の炭鉱爆発事故が起きたこの福智町で「方城大非常」の意味さえわからない人は、人口約2万5千人のうち、おそらく半数以上におよびます。まして全国的には事故の存在もほとんど知られていません。町内の小中学校8校で大非常を授業に取り上げているのは、伊方小、弁城小、方城中のみ。さらに、語り部も限りなく、資料や情報も少なく、授業時間が限られているため、内容も縮小されています。
そんな中、地元の伊方小では、12月の人権週間の事前授業として、11月16日に「方城大非常」をテーマに学習。子どもたちは、同年代の犠牲者や遺族と自分を重ねながら、郷土の歴史に理解を深めました。



「子どもたちに失われた命とその重さを感じて欲しい」と語る福圓寺の富永元元住職（伊方町丸）旧方城町社会福祉協議会の会長在職中に、哀悼のサイレンと歴史授業をはじめた。

今ではきけない「口説き」 方城非常唄

いつものころから、方城でうたわれた唄があります。「方城非常唄」。遺族の悲しみが唄となり、やがて犠牲者のめい福を祈った盆踊りの「口説き」となりました。
豊前田川の名も高き 三菱方城炭坑にて 八百余名の犠牲者を出した哀れな大非常 六番まであるこの非常唄は、かつて事故を目の当たりにした池本喜代蔵さんが、生前、盆踊りで必ず披露していたという唄です。その節まわしが踊りの輪の中から聞こえてくる、姿は見えなくても、ああ池本さんがやっているなとわかるほど地元で評判でした。しかし、その唄もいつしか途絶え、今では唄える人もいないと言われていました。



方城での盆踊りの輪（昭和34年8月）